

冬

木

亨

詩

集

冬

木

亨

詩

集

冬木 亨詩集 定価 一、八〇〇円 本体価格(一、七四八円)

© Tōru Fuyuki, 1989

平成元年八月五日印刷
平成元年八月十日発行

著者——冬木 亨

発行所——上毛新聞社出版局

前橋市古市町一一五〇一一二一

☎ 〇一七二一五一一四三四一(代)

目 次

眩暈	幻想	無題	虚像	旋律	宵の瞬き	淨められし心	間奏曲	真実	海と眞珠	ささやきに	幻影のソナタ	春になつて	夢のあとに
40	38	36	34	32	30	28	24	22	20	18	14	12	10 8
						26							

淋しき夕べ

ソネット

ある心象

* 詩は

* 130

俳句八首 短歌十五首

138 136
132

126 124
120

夢のあとに

ふたたびミモザの感触に酔いましよう

きっとセルリアン・ブルーの命題への想い
しかしそれは哀しみのように遠くにあります
人知れず人知れず遠い処にあります

ふたたび心のうちに深く刻み込みましょう

きっと美しい頬笑みの命題への想い

しかしそれは哀しみのように遠くにあります
人知れず人知れず遠い処にあります

やはり愁いはひねもす波打ちます

恥じらいを案ずる時間ばかりが過ぎ去ります
神聖な祈りはいづこの風に吹くのでしょう

願わくば在りし日の幻をもう一度つかみたい

そして幻の断片に残された

あのしめやかな純白の囁やきが聞きたい

春になつて

花々が咲く

どれを見ても美しい

ようやく心が弾み

愉しさが甦つてくるはずなのだ

それなのに何故だろう

ふと悲しみが浮遊する

永い年月の憂いが

そのあたりに隠れているようだ

生きとし生けるものの中に

人間がいる

もしかすると人間は

あちらこちらに飛び交う鳥たちの影

なのかもしれない

飛ぶことを欲しながら飛べずにいる人間

そうして嘯く人間がいる

また花々が咲く

初夏

榛名湖にて

岸辺の石垣に立ち

夕暮れかけた風景を眺めている

山は鎮まり

ゆうすげが湖に映えている

いつとき

さわやかな心境の色合いを愛する

いかにも美しく

また窓まどやかすぎるほど
つつましく

だが間もなく陽は落ち
ゆうすげも見えなくなろう
ふと明日のことを思う

幻影のソナタ

I

ゆるやかに沈黙の言葉が芽ばえる
月の光の窓辺にたたずむ恋人への
ひたすらな愛のしらべのように
切つなさの一握りをほぐして

絶えず不安のなかで